

——今年を振り返って

人間は自然の制約を次々と乗り越えて高度な近代文明を築き、生活水準を飛躍的に向上させました。にもかかわらず、今の世界は問題が山積しています。ウクライナや中東などは、いまだに民族対立や領土争いといった昔からの発想が横行し、巨大な富を生み出した経済は他方で格差を広げ、社会の分断を加速させています。テクノロジーも利便性を飛躍的に高めましたが、テロや戦争、自然破壊を止められません。人間は賢いはずなのに、何故自ら招いた問題を解決できないのでしょうか。「人間とはそもそも何なのか？」という根源的な問いに皆が正面から取り組まねばならない時期にきているような気がします。

● 不穏なる世界情勢が文化芸術に及ぼす影響とは？

このような危機的状況にあっても政治家や大企業が100年後の地球のことを考えなければいけないのですが、目先の懸案処理に心奪われ問題を先送りしている。そのような現在、制約や利益に囚われることなく未来のことを考え自由にそれを表現できるのが唯一芸術家なのです。文化芸術には巨視的・歴史的に物事を俯瞰し、常に時代に向けた問題提起や問題解決のヒントとなる新しいアイデアを提示するような基本的姿勢があり、それを如何に美意識や技法で表現するかという大きな役割を担っています。ですから世界情勢が文化芸術にどう影響を及ぼすか？という受け身ではなく、こういう時だからこそ芸術家は本来の持てる力を発揮し、これまで当たり前常識だと思われていたことを一つ一つひっくり返し、様々なことを提案することで、どうすれば人類が100年後にも生き残り、且つ良い方向へ向かうことができるのか様々なヒントを示して欲しい。今こそ芸術家の出番だと思うのです。それを社会がどのようにサポートしていくか。目先の利益や効率ではなく、長い目で見たとき自然のなかで何が最も私たちの生活を豊かに、かつサステナブル（持続可能）にしてくれるのか。地球の未来を視野にそのような発想が必要であり大切です。一般の人にも伝わりやすい表現手段を持つ芸術家が最も重要な役割を担っていると思いますね。

インタビュー

近藤誠一氏

近藤文化・外交研究所代表、国際ファッション専門職大学学長

今こそ芸術家が力を発揮すべき時



——日本の文化その価値とは？

諸外国との比較において日本文化に最も特徴的なのは、自然に対する考え方だと思います。欧米においては、「自分は主であり自然は客体である」という主客二元論がまだ発想の基盤にあり、その結果自然は人間にとって資源にすぎません。日本は違います。人間はあくまで自然の一部。そのような日本の発想が実は現在直面している世界的問題の解決の糸口として相応しく、これからの時代に必要なるものであるはずです。

自然を尊び調和を重んじ、自分は自然の一部だと考える日本文化の発想は、特に現在の自然破壊や分断の世において、民族や経済の対立、領土争いなどいけば政治経済の表面的争いを乗り越えるうえで、実は問題の処理の仕方を根底から変える力を持っている。そのような基礎があることにより、目先の物質的利害の対立に明け暮れてはいけけない、私たちは皆同じ人間であり自然の一部なんだという感覚へと繋がりますよね。イスラエルとハマスどちらが正しいか？ どんなに議論しても絶対に結論はでない。でもどちらも人間じゃないかと。この星にずっと暮らしてきて家族もいて、そこは一致しているわけでしょう？ だからもっとその部分の厚みを増

していくことで、問題は完全に無くならないけれど軽減することは十分できると思います。

● 何から始めればよいのでしょうか

誰が何をすればいいのか？ 1050〜60億ある文化庁の予算を倍にしたからといってそれだけで解決する問題ではない。やはり社会全体がアーティストを応援する当たり前の素地のようなものを持つ必要があります。アートは失敗しても誰かが死ぬわけではありません。どんな芸術家には好きなことをやらせ様々なヒントを世界に与えていく。そこに日本的な思想があればそれが世界に広まっていく。そのような意味では今の日本社会の芸術に対する姿勢は極めて物足りないですね。では何をどうすればいいのか？ 教育なのか政策なのかメディアなのか財界なのかはよくわかりません。しかしながら間違いない今こそ芸術家が最も力を発揮すべき時期。そういう世界情勢になっている。

これはビジネスにも言えることですが、文化芸術の持つ潜在力こそが現状の問題を解決する力、その源泉になるのだというところを理解し後押しする必要があります。日本国内という狭い範囲に限定せず世界を視野に入れ、人類全体の問題、歴史のなかの現代の問題というものを命題に据えながら、しかし表現あるいは解決のヒントを表す手法は日本の伝統文化に軸足を置く。そうすることでユニークさも出ますし、イノベーションに火がついて適切な解決につながるヒントになると思います。世界を見ながら日本の良さを渗みださせるような工夫をすべきですね。どこにいても世界を見て、しかし日本の伝統的な価値を中心に据えることこそが今我々に求められることではないでしょうか。

1946年神奈川県生まれ。71年東京大学教養学部教養学科卒業。外務省入省後、在米国日本大使館参事官、同行使、外務省経済局審議官、OECD事務次長、外務省広報文化交流部長などを経て、ユネスコ日本政府代表部特命全権大使、駐デンマーク特命全権大使、2010年から13年まで第20代文化庁長官を務める。文化・芸術の発展、国際交流に貢献し、瑞宝重光章、フランス国レジオン・ドヌール・シュバリ工章を受章。